展覧会について

太清は生涯にわたり、“水”に連関する多くの作品を描きました。日本画の修行を始めたばかりの若き太清に、師・児玉希望は「水を描いてみよ」と指導し、その課題に取り組んだ経験が記録に残っています。初期においては具象表現を目指す太清ですが、中期には次第に波紋や揺らぎ、映る対象物など光や風の作用を描くことで水の存在を表し、後期には雨や雪、空気の湿り気から感じ取った〝水〟の感覚を自己の感性を添えながら表現するに至ります。

四方を海に囲まれ湿潤な気候にある日本列島は7割近くが森であるといわれ、その南北に長い地形は川池・湖沼・海原といった多様な環境、そして生命を生み出しました。太清は70年の画業において、このような自然を丹念に取材し、多くの写生を残しています。

本展は、佐藤太清が描いた“水”に視点をあてながら、生涯における作品変遷、自然を描いた足跡、感受した自然を解釈したことにより生まれた心象世界をたどります。

展示構成

第1章 模索の時代

柳の枝に冷たくも重みを持たせた雪の世界。潮の匂いを想起させる海辺の情景。最初期における水の表情は、未ださりげない。雪や海の存在は、群れて騒ぐ鳥や海辺で暮らす人々の生活といった主題を物語るための背景ともいえます。その後《竹窗細雨》(1951年)においては、降る雨のしずく、雨がもたらす部屋の湿度、室内の水槽など、水を描き分ける手法を追求。絵画の世界に漂う空気を感知させる表現が顕在化されるようになりました。また30歳にして、新文展へ初入選した《かすみ網》(1943年)には、死にゆく鳥と平穏な空という対極の世界が描かれます。太清の生涯におけるテーマといえる水の様相と対極のイメージは、既にこの時代から内在されていたといえます。

2.《かすみ網》1943年
板橋区立美術館 蔵

第2章 抽象への転換

対象物を造形的に解釈し絵画制作がおこなわれたこの時期、水辺に映り込まれた光景は、多くの画題に取り上げられています。実在の植物と水面の反映がつくりだすシンメトリー(対称性)への関心は昭和27年(1952)《睡蓮》より見られ、《冬池》(1955年)ではその形象を主題に、《冬日》(1962年)には抽象化へと更にその解釈は深められました。一方、《雨の日》(1952年)、《樹》(1956年)、《水芭蕉》(1963年)では、水に映る光景と共にその場に漂う空気の状態を濃厚に表現しています。映る光景を変奏的に解釈しつつ、そこに漂う空気の表現はどのように追求すべきかと挑んだ太清は、対象物の写実的な描写を極限までそぎ落としました。
光景と空気に対する表現の比重を大胆に変化させつつ、実験的な画面構築を行ったのがこの時代です。

3.《雨の日》1952年
福知山市佐藤太清記念美術館 蔵